

清泉女子大学初代学長 マザー・クレア・クロフォードの紹介 ～北原妙子論文のまえがきとして～

理事長 塩谷 惇子

清泉女子大学の創立が、聖心侍女修道会を母体とするキリスト教のカトリック精神とそのネットワークによることは、すでに 63 年になる大学の歴史の中で承知のことである。当修道会は、1850 年にスペイン、コルドバ近郊の村に生まれたラファエラ・マリアとその姉妹ピラルによって 1877 年に創立された。シスターズはイエス・キリストの生涯によって示された神の愛に応えて、人間らしい教育を受ける機会のない人々を優先にし、今も、世界の 20 か国で広義の教育活動を展開している。

聖心侍女修道会のシスターズの日本における最初の教育活動は、1935 年、東京の麻布三河台の旧志賀直哉邸で始まった。茶の湯、手芸、ピアノ、英語、料理教室など花嫁修業にふさわしい内容が中心で、シスターズが最も大切にしていた宗教、特にキリスト教を教えることは当時の風潮から許されなかった。

1945 年、終戦後、国内外の政治・思想・風潮も 180 度転換。連合軍総司令官マッカーサーは「日本のキリスト教化を占領政策の重要な一環とした」(藤原彰『日本民衆の歴史 10』中、「占領と民衆運動」、森本季子著『泉は涸れず』下巻 492 頁から引用)。当修道会はキリスト教を核とした学校教育活動を本格的に開始するために、ローマの総本部から、シスターズを次々に派遣した。戦前は 3 回に分けてシスターズが派遣されたが、戦後、派遣された第一次グループは 1947 年に 9 名編成で来日し、そのリーダーがマザー・クレア・クロフォードであった。彼女は米国籍であったが、イタリアで生育し、若い頃には小説家の父フランシス・マリオン・クロフォードに随伴し、イギリス、ベルギー、ドイツなどで遊学した当時の教養ある女性であった。その家系等については、北原妙子氏の論文に紹介されているのでここには特に記さないが、クレアの両親、祖父母の経歴、家柄を知ることは 19 世紀の西欧と米国の歴史を学ぶ一如ともなる。

マザー・クレアは修道会に入会したときに、世間で持っていた家柄、財産、才能、評判等のすべてを捨てて、質素な修道生活を全うした。日本で、あるシスターに語ったと言いつた伝えのある言葉が印象的である。「わたしは若い頃、あまりにも贅沢な生活に慣れていた。それは罪と感じている」。彼女は驚異的な広い知識とエネルギーに満ち溢れていたが、生涯、謙虚で、おおらかで、単純な愛に生きた修道者であった。父フランシスは、その母エリザ

ベト・バードンが英国の長老派に属するキリスト教徒であったので、子供のころはその派の教会に通っていたが、成人してインドに行き、そこで他宗教と出会い、注意深く比較宗教研究をした後、ローマ・カトリックに改宗した。音楽的才能にも恵まれ、バチカンの合唱団のメンバーも務めた。かれの著作活動にはカトリック信仰が色濃くにじみ出ているとのことである。残念ながら、筆者はその作品の一つも読んでいないのだが。父の深いカトリック信仰は、クレアを含めて4人の子供たちに影響を与え、クレアの姉エレノールの息子二人は司祭となっている。クレアも音楽の才を受け継ぎ、横須賀時代にピアノを後ろ手で弾いて余興をしたとのことである。その他、文学にも、演劇の才能にも恵まれ、若い頃は父のよき話し相手であったが、18歳になろうとする1909年4月9日、父は病死する。

マザー・クレアの経歴につき2013年7月、ローマに保存されている文書庫で確認したことを中心に以下、簡略に記す。

1890年4月16日、ニューヨークに生まれる。

(但し、森本季子の『泉は潤れず』下、P494および、クロフォード研究家パトリシア・ハーゲマンによると、誕生地は当時、母親が療養していたミュンヘンとなっている。)クレアはパートランと呼ばれる男児との双生児であった。

1922年11月20日、ローマのヴェンテ・セッテンプレの聖心侍女修道会志願院に入会する。(当時、この修道院で創立者のラファエラ・マリアが晩年を過ごしていた。)

1923年5月21日、当修練院にて着衣を行い、修練女となる。

1925年6月21日、モンテ・マリオ修道院にて初誓願を宣立する。

1926年から28年まで、有期誓願者として、ローマのヴェンテ・セッテンプレに派遣され、フランス語、英語、ピアノの教師として働き、「イエスの聖心」への信心を広める宣教活動に従事する。

1928年から29年まで、第三修練期をモンテ・マリオで過ごす。

1929年から31年まで、第二修練長の務めを果たす。

1931年2月2日、ローマのヴェンテ・セッテンプレ修道院で終生誓願を宣立する。

1931年から1946年まで、ローマで、日曜学校の責任者、管区会計の補助、修道院顧問など、種々の務めに従事する。

1946年から47年にかけて、日本に派遣される9名のシスターズとともに、スペインのカディスから船でフィラデルフィアの修道院に渡り、日本行きの準備をしつつ、米軍が提供してくれるという日本への輸送機を待つ。

1947年5月30日、9名のシスターズとともに、日本(羽田)に到着。

1947年から48年、横須賀のアメリカン・スクールで働き、その後、横須賀に設置された清泉女学院で英語を教え、「祈禱の使徒会」に従事する。

1950年、清泉女子大学の初代学長に就任し、12年間務める。

1965 年、動脈硬化により完全に盲目となる場所であったが、幸いに生涯の終わりまで、わずかな視力を保つことができた。そのころから大学での授業は放棄せざるを得なくなる。鎌倉修道院で過ごす。

1972 年末に流行性感冒から肺炎を引き起こし、入院。退院後、鎌倉の修道院から大船城廻修道院に移り、最後の 2 年余りを過ごすことになる。一人では何もできなくなり、いつもシスターが付き添うことになった。シスター・クララは自分の世話をしてくれる姉妹の愛に感動し、感謝の念をよく表し、また姉妹はシスター・クララの穏やかさ、謙遜と細やかな心遣いにより感化を受けた。

1974 年ごろから、記憶と知的能力が傾き始め、姉妹たちに「もう私には何も残っていない。すべてを失いました」と口にされた。姉妹が「何を？」と尋ねると「私の知性を」と答えられたという（逝去後、院長がまとめて全会員に出した手紙より）。

1975 年 1 月 13 日、帰天。

この紹介文中の、マザー・クレアとシスター・クララは、同一人物である。日本に着いたとき、すでに 57 歳であったので、シスターは日本語を学ばず、生徒、学生とは英語を使い、修道院ではスペイン語を使用していた。初期の清泉女子大学の学生たちは、彼女をマザー・クレアと呼んでいたのも、タイトルにもこの呼称を用いた。その後、第二バチカン公会議によって、修道女は日本では「シスター」の呼称で統一されたので、1965 年代以降、晩年の彼女についてはシスター・クララと修道会で呼ばれた。そのため、当照会文では二つの呼称を使用した。クララはイタリア語ではキアラであり、英語圏ではクレアと発音されるが、日本ではスペイン語的発音でクララが用いられている。

清泉女子大学の草創期である最初の 12 年間に大学の土台ができた。そこでの教育方法、学生と教師との関係、教師とシスターズとの関係などは、今日の大学にも引き継がれるべきところと、同じ形を継承することが困難な点と両方あるが、今後の清泉女子大学の方向を考え、策定する上にも、初代学長の広い教養、国際性を学内外で認識することには意義がある。

今回、東洋大学の北原准教授に寄稿を依頼した経緯は以下の通りである。本学で英語を長年担当され、地球市民学科を設立し、副学長など多くの役職を担ってくださった実吉典子名誉教授が、2011 年の秋、フランシス・マリオン・クロフォードの研究から、シスター・クララ・クロフォードについても研究している東洋大学の米文学専攻の北原妙子准教授を紹介してくださった。北原先生は論文作成のために、クララについての情報を初期の本学卒業生から聞き取り調査をしたいとのことであった。その後、論文にまとめたので、どこか、清泉で発表の機会がないかを尋ねられ、2012 年度末、キリスト教文化研究所の研究

会でご発表いただくことになった。そこで、聴衆は数名の教員であったが、大変感銘を覚え、大学で広く共有したいとの希望が広がった。そこで大学の紀要への投稿可能性について当時のキリスト教文化研究所研究所所長有光教授より図書館長佐伯教授に依頼していただき、それをうけて紀要委員会は特別寄稿という形で北原先生へ本紀要への御書稿をお願いすることになった。

本学の初代学長について、東洋大学の北原妙子先生に研究していただけたことは、まことに光栄なことであり、心より感謝申し上げたい。

次に、北原妙子氏について簡略ではあるがご経歴を紹介させていただく。

1989 年、東京女子大学文理学部英米文学科卒業。1991 年、ブラウン大学アメリカ研究科修士課程修了。MA(Amerikan Civilization) 取得。1996 年、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。修士（文学）取得。1999 年、同博士課程修了。2004 年 東京大学学位博士（文学取得）。博士論文ではヘンリー・ジェイムズと同時代のライバル作家であったフランシス・マリオン・クロフォードとの比較考察を行われた。『光と陰 ― ヘンリー・ジェイムズ、F. マリオン・クロフォード比較研究』。その後もクロフォード一族についての研究をつづけ、近年はシスター・クララ・クロフォードの祖父でワシントン議事堂ドームの上の彫刻で知られるトーマス・クロフォードや、叔母で明治時代に英国公使フレイザー卿の妻として来日したメアリー・クロフォード・フレイザーについての研究を行っている。ちなみにメアリー・クロフォード・フレイザーの分厚い著書は日本語に翻訳されて公刊されている。（『英国公使夫人の見た明治日本』横山俊夫訳、淡交社、昭和 64 年）。

最後にシスター・クララ・クロフォードが、残された遺書を二つ紹介したい。一つ目は 1965 年 2 月 14 日、東京で書かれた詩で、この年、動脈硬化に陥り、健康が傾き、死の準備、お別れの準備として書かれたものである。英詩をそのまま記載する。

DYING INTO LIFE

Not in light but in darkness shall we seek Thee,
Not in calm but in wild waters shall we find Thee.
As the secret of that paradox lies deeply
In our soundless hidden depths of spirituality.

That time is gone when all was jollity,
When what I felt was Love's reality.

I did not know that He possessed me,
I truly thought 't was I who'd lost Thee.

I'm in the deepest caverns of that ocean,
In which we die; 'tis a promotion.
'Tis dying into life, a vast emotion,
Deep set in that one point, 'tis radiation!

It leads me to the land of passive action.
Those depths I reached with great and true devotion,
When I appeared to be in that vast ocean
An unsubstantial drop, lost into Motion.

But dying into life is not destruction.
'Tis moving gently into transformation,
When all is life, and Death's own consummation
Leads us on to transfiguration.

Not Death, but life is then our consolation.
Not darkness or foul sin, our desolation.
Light in His Light, we now possess Him;
Dying into life is Transfiguration!

Tokyo, 14th February, 1965

Clare Marion-Crawford aci

二つ目は、1974 年 1 月 12 日、大船で書かれている。これはスペイン語で遺書風である。

Como no sé si la última llamada de mi Padre Dios para volver a estar con El en su casa para siempre, va a dejarme tiempo para despedirme de mis queridas Hermanas, quiero hacerlo hoy.

Volviendo atrás con el recuerdo, aquel instante tan lejano, en que dejé todo para seguirle, quiero decir, que nunca, ni por un instante me arrepentido ello y que estaría dispuesta a empezar de Nuevo en este momento mismo. Mi vocacion de Esclavas del S.Corazón ha hecho de mi vida una vida totalmente feliz; mi agradecimiento a Dios va a durar toda la eternidad.

Muy agradecida estoy también a las Hermanas y Superiores con las que he convivido y que con todo su amor y caridad han colaborado con Dios para hacerme feliz; quiero al mismo tiempo pedir

que me perdonen si algunas veces por mis miserias las he hecho sufrir y las aseguro que dede el cielo seguiré interesandome de ellas y de todas sus cosas.

Una razón más de agradecimiento a Dios tengo en el hecho que ahora la iglesia permite la cremación del cadaver, cosa que siempre he deseado.

De una pequeña poesia que escribí en Yokosuka, solo un mes después de mi llegada a fin de mayo de 1947, dejo como recuerdo mio a mis queridas hermanas, los ultimos versos, pálida expresión de mi gran devoción al Corazón de Cristo.

“O Coeur cuvert, flame ardente、je puise en Toi
Riche de trésors divins, toujours fais moi
Vivre de confiance et jois dans ta bellw loi!
Sacré Coeu de mon Jésus, je crois en Toi”

Clare Marion-Crawford a.c.i.

“Oh Corazón abierto, llama ardiente yo vengo a apagar mi sed en Ti,
Rico de tesoros divinos, hazme siempre vivir de confianza y alegría en tu ley tan bella!
Sagrado Corazón de mi Jesús yo creo en Ti!”

(詩文ではないので、拙訳で、少々意訳であるが、翻訳をつけておく。)

永遠に父である神の家で過ごすために、最後の呼び出しが、いつ父である神からくるかわからないので、今日、愛する姉妹たちにお別れをしたためて置きます。

過去を、もうずっと遠くになった過去を振りかえってみると、主に従うためにすべてを捨てたそのときを、私は決して、一度も悔やんだことはありません。同じ道をもう一度新たに行う気持ちをもっています。聖心侍女への召命は私の生活、いのちとなり、全く幸せそのものでした。神への私の感謝が永遠に続きますように。

私は一緒に過ごした姉妹たち、長上たちに大変感謝し、愛と愛徳をもって私を幸せにするために神様と協力して下さったことを心より感謝いたします。同時に、私自身の惨めさによって姉妹たちを苦しめたことをお詫びいたします。そして、天から絶えず皆様を思い、すべてのことについて取次の祈りをするをお約束します。

神に感謝するもう一つの理由は、今、教会は遺体の火葬を許可していることです。これ

は私がずっと願っていたことでした。

1947 年 5 月末、横須賀に着いて一か月後に書いた詩の最後の節を、愛する姉妹たちへの私の思い出として書き写します。それはキリストのみこころへの私の熱い信心のまづい表現ですが。

「おお、開かれたみこころ、わが渴きをいやす燃えるほのお、
豊かな神の宝庫、あなたのこれほどにも美しい掟に
信頼と喜びをもって いつも生きることができるようにしてください。
イエスの聖なるみこころよ、私はあなたを信じます。」

